
雨天決行

文月アリカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨天決行

【Nコード】

N3382P

【作者名】

文月アリカ

【あらすじ】

少年は、雨の校庭に少女の姿を幻視した。三題噺お題…北国・ラムネ・傘

教科書を読み上げるだけの教師の声を聞き流しながら、僕は寒さに震えていた。

梅雨だから雨が降るのは仕方ないでしょう。しかし北国特有のものか、それとも今年に限ったものか――六月とは思えないほどの寒気が襲ってくるのはいただけない。

夏生まれ都會育ちの僕にとってはこの気候は大敵というもので、越してきてから一年経ち田舎の牧歌的な空気にすら適応していても、これだけは慣れることが出来なかった。

窓際の座席は暖房の真横だから、との喜びはつかの間のもので、隙間風を完全にスルーすることが判明した今となっては恨めしいだけではない。ちよつとそこの半袖の男、席代わってくれ。

いっそのこと膝掛けでも持ってくれば足の冷えから解放されるのだろうかと思うが、薄っぺらいプライドが邪魔をしてまだ踏み切れていない。雪の降らない我が故郷では、膝掛けとは女子の、それも特に寒さに弱い人間が使用しているものだったからだ。

それでも、冬場にはそんなことを言っていられなくなるだろうという予感に冗談で済まされるレベルのものでは無くなっていた。気が滅入る話である。

相変わらず棒読みトークを続ける教師と窓を強く叩く雨音の織り成す不協和音に対する文句が次々と湧き上がって来るが、それら全てを口内で噛み殺してノートを開いたままの机に突っ伏そうとした。別に、教師を批判して優等生という今の立場を失いたくなかったというわけではなく、単純にそんな元氣も出なかったというだけの話だ。くだらないことに力を割くぐらいだったら、睡眠時間としたほうがまだ有意義である。

だからその時視界の片隅に人影を見つけたのは、幸運というか不運というか、微妙なところによるものだった。

清純さの塊のような白色のワンピースに、創作世界での海賊が旗印としていそうな麦わら帽子。曇り空と土砂降りの雨に相応しくないその恰好が嫌に似合っていて、僕の目を惹いた。

見た目から判断するにおそらく女の子と呼ぶべき年の女性だとは思いますが、距離が離れていて正確な年齢までは判別できない。

寝ようという目的も忘れ思わず硬直してしまった僕の視線の先で彼女は、ワンピースの裾をふわりと踊らせて、雨の中を闊歩していた。

暗い校庭にあって明るい服装ながら、空間とマッチしている。違和感が、あった。それが何かは分からなかったけれど。

けんけんぱのステップで、彼女は雨のグラウンドを飛び跳ねる。表情は見えないが、まず間違いない満面の笑みだろことが予想される快活さが、動きからにじみだしていた。

僕は、頬杖を突きながら彼女を見て、

——楽しそうだなあ。

ただ、そんな風に思った。自覚せず口元がほころんでいたかもしれない。

何度目か分からないけんけんぱの「ぱ」を踏んだ少女は、何かを見つけたのか天を仰いだ。

一瞬だけ、ここからでも表情が垣間見えた。やはりと言うべきかあどけなさを残した少女の表情は、疑問を持っているときのそれに似ている。

しばらく灰色の空を見つめていた彼女は、不意に視線を下ろし——僕を見て、笑ったような気がした。

授業の終わりを告げる鐘の人工音で、目が覚めた。

クリアな記憶はチャイムが鳴ったところまで地続きで、どのタイミングで眠りに落ちたのかさっぱりわからなかった。

慌てて周りを見渡せば、先程までとは違う点が二つほど見受けられた。まず、挨拶にも興味がないらしい教師の姿が既に教室にない

こと。そして、先程まで――夢の中では雨が降り続いていた空に切れ間が生まれ、日光が入り込み始めていたことだ。

違いを把握することで、やはりさっきまでの夢だったと分かる。そして、あの時感じた違和感の正体も。

全身の動きがあれほど詳細に見えたのだから当たり前といえそうだ。“夢の中だから”分からなかったのであろう。

――彼女は、傘を差していなかった。

少女だけを雨が避けて通っているような幻想的な光景は、およそ現実のもの足りえないのである。

＊

二度あることは三度あるとはよく言ったもので、一度観測された事柄は、その後急速に事例を増加させるのが通例だ。

誰でも経験があるだろう。意味を知った単語が急に目につくようになったり、人混みの中でも知り合いの顔は容易に見分けられる、なんてことは。

それらと同じだ。

二度目まではただの白昼夢として片付けていたものの、つい昨日三度目の遭遇を果たした時、僕の中で彼の少女の存在は信じるに足るものとして確立した。僕に夢――とてつもなく鮮明な、それも地続きの――を見ることが出来る類の才能が眠っていたという考えに比べても、突飛さと非現実さではどっこいどっこいだし、なにより夢があるじゃないか。

あの日――雨中の少女を初めて認識してから僕は、雨の日の校庭には決まって小さな人影を見つけられるようになっていた。

ただし初回で目が合ってしまった気恥ずかしさから、そっと覗いているだけだったけれど。

「なあ。最近お前、やけに気抜けしてないか？」

「失礼だな、極めていつもどおりじゃないか」

机に肘をついてぼーっと快晴の空を見つめていると聞こえた、聞き覚えのある声に顔も向けずに返答する。

晴れの日には少女が現れないことはもう経験則として知っていたが、この一週間で窓の外を眺める事自体が習慣になりつつあるのだ。ま、話手が誰かなんて声で分かっているし、それほど重要そうな話でもなさそうだったからの対応ではあるけれど。

「それだよそれ、その反応。前までなら顔ぐらいは向けてくれたじやん。あと、俺がボケたらハイテンションで突っ込んでくれただろう！」

「付け足すように云うなよ、どうスルーしてやろうか迷うじゃないか」

「スルーすることは前提なんだな……」

呼吸をするようにボケないと死ぬ病気にでもかかっているらしきこの友人に付き合っているのは時間がどれだけあっても足りなくなることを鑑みれば、スルー技能は必須だろう。

「で、結局何の用なんだよ？ かまってるほしだけなら帰ってくれ」

「だーかーらー、梅雨に入ってからのお前おかしいよ、ってハナシ。なんなの？ 雨にちよつとでもかかったら全身溶けちゃうの？」

「僕、実はナメクジだから。そういうわけだよ」

何の説明にもなっていない冗談ではぐらかした僕は、話は終わり、という風に手を軽く振った。背後の相手は全く納得がいていないようではあるが、僕にも説明できることなんてなかったなのでそこは納得してもらうしか無い。

それでもしばらくの間は僕に説明責任を果たせようと迫り続けたものの、頑として口を開かなかったから諦めて自分の席に戻ったようである。

「何だよ全く、つれねえヤツだなあ……恋煩いかなんかだったら全力でからかってやろうと思ったのに」

捨て台詞のように聞こえてきた言葉は、余計なお世話の極みだった。もしそういうコトが起こったとしても、絶対彼には相談しないと心に決める。

――しかし、それほどまでに最近の僕は異常だったのだろうか？

＊

日が経つに連れて、何に端を発しているのか分からない焦燥感ばかりが募っていった。

原因が分からないのだから対処法がわかるワケもなく、空回りする気持ちを抑えながら僕は窓の外を見つめ続けた。喉に刺さった魚の骨が外れない感覚と言えはいいだろうか。

午後の陽気に包まれたグラウンドでは先輩達が走り回っている。三年生は今年受験だろうにこんなことではしゃいでいいのだろうか、という疑問が脳裏をよぎってどこかへ飛んでいく。

勿論そこに少女の姿があるわけもないことは分かっていたが、思わずため息が漏れた。

——恋心ではないのだ。ただ非日常に惹かれているだけのあまり健全とは言えない感情だと、自分が一番良く分かっている。

授業の終わりと共に視線を教室内に戻す。黒板の隣に張られたカレンダーが視界をよぎり、もう七月も間近だということに気がついた。

梅雨も終わるか——その言葉は口にしてはならないもののような気がして、口内で噛み潰した。

＊

期末テストを翌週に控えたその日、久方ぶりの雨が降った。何となく待ち遠しくなりつつあった雨。雨中の少女をまた見ることが出来るということが理由の一端であることは否定しない。

なににせよ僕は、一時限目から気もそぞろで左側に広がる雨天の校庭にばかり目をやっていた。昔とは違った意味で授業を聞く気がないまま、午後の授業を迎え——その姿を、見つけた。

雨の中跳ね回る少女は僕の中で元気さの象徴のような位置を確立していたのだ。

けれど。

現れた彼女からは以前までの快活さが失せて、雨空を見上げてただ立ち尽くすのみ。

教室からでは彼女の表情は見えない。ただ、今までと変わらず雨に濡れた様子はない頬が光を反射したように思えたのは僕の気のせいだろうか。

――涙。涙滴が教室からの明かりを照り返したのだ。

その可能性に思い当たったとき、知らず手が伸びていた。クラス中の驚愕の視線を浴びて怯むものの、今更引くことは出来ない。

頭痛が酷いので保健室に行く、という意味の文言を言い捨てて席を立つ。教師も勢いに気圧されたのか、背後から掛かってきた声は了承の意を含むもの。

指を立ててきた友人に向かって小さく首を縦に振って、教室をでた後――駆け出した。言わずもがな、頭痛に耐えかねて保健室に向かったわけではない。

皆勤賞は捨てることを覚悟して、僕は階下に向けて一步を踏んでいく。

＊

授業で弛緩していた状態から急に行なった階段昇降は、文化系の身には辛いものだった。

息を切らしながらも、まろぶようにして傘を引つつかみながら玄関から飛び出す。目指すは運動場だが、授業中ともあって教室群からの死角を考えつつ歩を進める。

中々の威力を持った雨は、傘を破壊せんと押し寄せてくる。視界の確保が難しいほどの豪雨は梅雨前線の悪あがきか何かならうか。

校庭を覗ける位置で屋根の下に入ると、上から見ていた時よりも少々華奢な姿が目に入った。僕の数十メートル先で相も変わらず空の灰色に見とれている。

実在したのか――という驚きが先に立った。あれほど気にかけてはいたものの、こうして目前にするまで疑う気持ちが強かったのである。教室の窓からは見えてもこうやって直接会うことはままならないのではないかと思っていた、とも換言できる。

声をかけようか逡巡したのは一瞬だった。孤独感が滲み出ている

その背中を見て、僕は迷いを振り切って声を飛ばす。あんな背中を見せるのはリストラされた五十間際の男ぐらいで十分というものだろう。

「ねえ、その――」

最期まで言い切れなかったのは、少女をなんと呼称していいものか分からなかったからだ。それ故にか、彼女は自分が呼ばれたと気づかず、顔を向けることすらしなかった。

この雨なら他の生徒に声を聞かれることはないだろうと判断し、今度はもつと声を張り上げて先程の続きから言い直した。

「その彼女――！」

図らず一昔前のナンパのようになってしまったが、お茶しな――い？ と続ける勇氣は僕にはない。

それでも耳には届いたのか、彼女は振り向いた。上からでは分らなかった、僕と同年代の整った顔の目元に光るものは見えない。そしてこちらを認識すると共に驚愕に似た表情を整った顔に浮かべた。それこそ、存在するはずのないものを見たと言う感じの。それはそのはずで、最初に笑いかけられたと錯覚したあの時以外はこちらが一方的に見ていただけなのだ。

「こっちに来ないか？ そこ、濡れるだろ」

手招きと共にそう呼びかけてみる。実際は濡れるからではなく、目撃される確率を下げるためであるが口にはしない。

「……ナンパなら、お断りです」

「制服でナンパする趣味はないんだけどな……」

平板な口調でそう言って彼女はすげなく首を振るが、こちらに興味自体は持ってもらえたようで、今度は向こう側から

「そんなテンプレートな文句を使ったのにナンパじゃないとは驚きです。では、あなたはどちら様でしょうか？」

「この学校の生徒だよ」

名前を名乗るのも変な話かなと思い、分かりきった答えを口にしてしまう。呆れられたかと思いきやそんなわけでもないようで、彼

女はしばらく考えこんでから、

「では、生徒さん。どうして私に声をかけようと思ったのですか？
何か用事でも？」

「用事があるわけじゃないけど……今日はあまりにも元気がなさそうだったから」

雨の中を飛び回っていた人物と同一人物か疑うほどだった、と付け加える。彼女はまたしても言葉を探すように宙を仰いだ。

彼女は一切こちらに寄ってこようとせず、豪雨にあたりながら会話を続ける。

「今日は、ということは以前から見られていたわけですね。……そうですか、つまりはナンパ師でなくストーカーさんだった、と」

「その結論には行かないで欲しいんだけど」
「冗談です」

くすくす、と忍び笑いに近い笑みをこぼされる。表情はくるくると変わるものの、声が平坦なままだから冗談に聞こえない。

彼女は、では、と前置きを口にしながらこちらに歩み寄ってきた。隣の軒下に入ると、右手をこちらに差し出して、

「見ているだけでもわかったはずですけど、ほら、こうすればもっとよくわかりませんか」

僕の手を握った。僕のものより一回りほど小さい手の感触は柔らかく人間のもの——けれど、湿り気が一つもなかった。少なくともそれまで一切雨に当たっていなかったはずの僕より乾いている。

「雨の中で傘も差さずにこんな状態の人間がいると思いますか？
なんなら髪の毛を触ってみても構いませんよ。どうせ結果は同じですし」

なるほど、それは確かに人間業じゃなかった。雨粒のすべてを避けるのも透過するのも、人外の技術だろう。

だけど、それがどうしたというのだ。そうだろうことは最初から予想がついていたのだ。

「ごめんなさい、私人間じゃないんです。頭のオカシイ子に見える

かもしれませんが、嘘は吐いていません。気持ち悪いでしょう、怖いでしょう？ ……私のことは忘れてください」

彼女のまくし立てを最後まで聞き干し、息を整えるのを待つ。目を逸らし去ろうとする肩を軽くつかみ、

「――わかつてる」

それだけが、口をついてでた。案の定、え、という疑問符付きの単語が返ってきたので瞳をまっすぐ見据える。

「君がどんな事情を抱えているのかは知らないけど、何か大変で孤独だったのは見てればわかる。見ず知らずの人間が言うのもなんだけど、せめて僕にも話を聞くくらいはできないか？」

いくら目撃されていたとはいえ誤魔化す方法はいくらでもあったはずの彼女が、初対面の僕に自分から暴露するというのはそれ相應の思いあつてのことだろう。それに真摯な感情で答えないのは、バカにスルーで返さないのと同じくらいに間違っている。

迷うように、逃げようか逡巡するように泳ぐ目を再度見つめ直し、

「お嬢さん、これからお茶でもいかがですか」

「……真面目に言いなおせばナンパに乗ると思うんですか」

ぷふっ、と吹き出した少女の手をとった。さて、学校をサボったことなんてないんだけど、こういう場合どうすればいいんだろうな。

＊

少女の手を引いて学校を離れる。

相変わらず雨は降り続いているけれど、先刻よりはちょっとマシになったので傘でなんとかなるくらいだ。どうにも彼女は傘のいない性質の持ち主のようだったけど、道行く人に不審がられるのは避けたいので僕の傘を手渡した。

初めは断ろうとしていたが、万が一のために持ってきていた折りたたみ傘を振って見せると大人しく受け取ってもらえた。備えあれば憂いなしの典型例みたいだ、と一人苦笑する。

「で、なんで公園なんですか？」

僕の思いつくところが他になかったからです。いや、田舎は街ま

で出ないと本当になんにもないんだってば——と慌てて釈明すると、なにやらツボに嵌ったらしく身体をくの字に折り曲げて笑っていた。「あんまり人に聞かれない話でもないだろ？　後付けの理由だけどさ。雨に当たらなくて人がいなさそうな場所ってここしか思いつかなかったんだ」

「寒さには強いですから構いませんけどね。レディーをエスコートするには何か足りないのでは？」

屋根付きの無人休憩所で二人腰をおろし、笑いあう。ここまで来る間に、話していて硬さが見えないくらいには打ち解けていた。

小動物みたいな雰囲気の子だ。それでいて年齢が読めない。

「はいはい、じゃあしばらく待ってて」

荷物だけを置き、僕は再度立ち上がる。手を振るでなく向かった先は、いわゆる一つの駄菓子屋だ。

田舎特有の古臭い店構えに侵入し、業務用冷蔵庫の扉を開いて瓶入りの飲み物を二本手に取る。置物と見紛うばかりに微動だにしないおばあちゃんの前に二百円をおいて、彼女の下に戻った。

「……なんですか、これは」

「ラムネ。振らないようにな」

瓶を受け取って怪訝そうにする彼女に対する答えは簡潔だ。それ以外に説明のしようがないほど単純な飲み物だ、ということが説明出来ればそれでいいわけで。

一挙手一投足を真似をせんと見張っている彼女を横目に僕は栓を開け、一気におおった。

「————ぶっ」

噴きだした音は隣からのものだ。まあそりゃ、炭酸飲料を事前知識なしでイッキしようとすればそうなるのも致し方無い。

笑い転げてやると盛大に睨まれたので、ちよつと自粛。

「……もういいです。で、私のことでしたか」

もう大分弱まってきた雨の音をBGMに、彼女はこう切り出した。「雪女、って知っていますか？」

「知識としては。えっと、君がソレだっというのか？」

今度こそ慎重に行こうとしたのか、ラムネを少しだけ嚙下する音が聞こえる。

「ちょっと急き過ぎです。私の一族の場合は雪女というより雨女、魔女というより人魚という方が正しいですね」

話の流れから言って、雨男晴れ男とかの類じゃないのだろうとは検討をつけて口に出さない。茶化していい事じゃなさそうだし。

それにしても、

「人魚？」

「王子様に恋をした人魚姫は魔女と契約するでしょう？　――曰く、もし王子が他の娘と結婚するような事になれば、姫は海の泡となって消えてしまうよ」

「じゃあその、なんだ。ある人に恋をして昔から住んでた場所を出てきた、とか？」

「まさかですよ。そんな恋した乙女に見えますか？　私」

百歩譲って、見えない。ご主人様を見失った小型犬みたいには見えるけど。けどそれをまともに口にだすのもなんだか悪い気がして――

「まず、姫なんて感じじゃな――」

「そこは言葉の綾というヤツです。気にしないでください」

なにも傘で叩く必要はないと思うんだよ。そりゃあひどい事言っただとは思っけれど。

少女は、説明することは他にありませんというような顔をして黙りこくってしまったので、まあ、口を開いてみる。

「つまり、王子様は見つかからないけどとりあえず地上に追い出されてしまった人魚姫は泡になるしか無い、ということか？　救いようのない話にしか聞こえないが」

「そういうことです。雨女として成熟するには依代となる伴侶が必要でして、それを見つけないことには消えてしまうわけですよ」

「最初からそうやって説明してくれたほうが分かりやすかったんじ

やないか……？」

分かりづらい喻えを持ち出したのは趣味か何かなのだろうか。ロマンチックにはなってたかもしれないけれど。

もう空になったラムネの瓶を握りしめた。何も解決しちやいないじゃないか。

「そう肩を怒らせないで下さいよ。義憤に駆られるのは人徳ですけど、まだ数年余裕がありますし」

今日虚脱感に浸って立ち呆けていたのは、最大のチャンスである梅雨の期間を逃したからだという。

「でも対象はまだ見つかってないんだろう？　その気もないって言うんなら、それは……」

消えるしか無いんじゃないか、と言う言葉だけは飲み込んだ。他人が気軽に口にしていいものじゃない。

「大丈夫です——あ、見てください。虹ですよ」

話し込んでいるうちに雨は上がり、空には虹がかかっていた。彼女は中身の残ったラムネの瓶を虹の足元に向ける。

「虹の下に宝物が埋まっているなんてファンタジーですけど、桜の木の下に死体が埋まっているというよりは現実的ですよね」

「桜には実物があるけど、虹にはないからな。確かめようのないものはまだ可能性を残しているわけだ」

そういうことです、と陽の光を背にした彼女は雨の中にいた時よりも余程儚げで、

「……そろそろお別れですね。雨、上がっちゃいましたから」

彼女はものの悲しげに、それでも明るさを取り戻した声でそう告げた。儚さを際立てている笑顔が見るに堪えないもので、僕はその胸に傘を押し付ける。

「そのラムネと傘は君の存在の証明だ。虹の下にはタカラモノが埋められてるんだよ。次会うときは、疑われないようにそれ差してこい」

首を傾げた彼女に向かってそれだけを言うと、手を振った。儚げ

だった存在感はより薄く、どんどん空気に溶けていく。

——ふと気がつけば、僕は小屋の中で独り立っていた。時間は数分も過ぎていない。

「私の好みは、私よりも行動力のある人なんです」

耳に残ったその言葉の音色で、今度こそはそれまでのことが夢じやないと信じられた。

＊

「結局あの後どうなったんだよ？ 彼女と学校抜けだしてヨロシクやってたんだろ？」

「そんなわけないだろ。ただサボりたくなったから行ってきただけだ」

「優等生のお前がかあ？ 大いに疑わしいもんだと俺は思うね」

身を乗り出しながら問い詰めてくる友人を、ずれた膝掛けを直しながらいつもと同じようにあしらう。

「物好きだなあ……だから、サボって桜の木を探しにってたただけだ。って。なんど説明すりゃ信じてくれるんだ」

「そりゃもう、本当のことを話してくれるまでさ——っておい、どこ行くんだよ？」

「帰る」

なんでったって僕は放課後になっても馬鹿話に付き合ってやらなきゃならんだ。めっきり寒さの増してきた昨今、遅くまで残ることは致命的だというのに。

「もうちょっとぐらいゆっくりしてけよ……それに、今日の天気じゃ傘いらなくね？ 戻しといてやるから、な？」

そこまでして残って欲しいのか。

コイツはホントに友達いないんじゃないかと思うが、他の奴とつるんでいるところを見たことはあるのでそういうわけじゃないのだろう。あまり人付き合いを見せない僕のことを慮ってくれているのだったら心外だが。

「最近雨に好かれてるんだよ。どこに行っても着いてきて、困った

もんだ」

今の天気は晴れだが、しばらくすれば暗雲が集まりだすことは想像に難くなかった。

「そんな事言って、顔がにやけてるぞキメエ。本当はお前も雨大好きなんだろう。この雨男め……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3382p/>

雨天決行

2010年12月10日21時15分発行